

## しあわせの記憶の継承の日独比較

研究員 上代庸平



文明の進歩にあたっては、先人の記憶を記録として残すことが欠かせません。その記録は、文書だけでなく「モノ」に遺されることもあります。2015年に世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の構成資産である端島炭坑は、その形から「軍艦島」の名で知られ、日本の近代化を支えた石炭採掘の記憶を遺しています。

この「軍艦島」のように、近代の産業化の記憶を遺す物件は、法律上「近代化遺産」と呼ばれています。この近代化遺産は、それが稼働することで近代化に果たした意味を記憶することに意味がありますが、それだけにその保存には困難が伴います。モノや資料単体からは価値が理解されにくいこと、現代技術による修復に必ずしも適しないこと、またその物件自体がなお現役で保存措置をとれないことさえもあり、近代化遺産の実情に照らした保存のための制度の整備と技術の確保が急務になっています。

この近代化遺産の大国と言え、何と言ってもドイツです。近代化遺産として初めて世界遺産となったフェルクリンゲン製鉄所、現役で稼働している世界遺産のファグ

ス製靴工場など、急激な近代化を経た国にふさわしく多くの近代化遺産を有し、欧州における近代化遺産の保存政策である「欧州産業遺産の道」の中心国として、法制度や保存技術の開発と移出も行っていきます。

その制度調査のため、「欧州産業遺産の道」の構成資産で、連邦共和国指定の都市建設重点文化財であるリュエダースドルフ石灰坑を訪問しました。採掘・搬出・加工・輸送の過程が、実際の施設に触れながら歩くだけで生き生きと理解できるように工夫されており、稼働時の佇まいを残しつつ必要な修復が施された機材を見て、法学部の海外FWとして調査に協力してくれた学生たち共々、当時の様子に思いをはせました。

日本とドイツは、急激な近代化を経験しており、近代化遺産のポテンシャルも共通するところがあります。ドイツを例にしつつ、日本でもしあわせの記憶が残されていくことを可能にする制度論を組み立てていきたいと考えています。



石灰焼成炉 (Ofenbatterie)。建屋には稼働時の加工機械がそのまま残され、炉内に入ることもできる。